みやぎ版

購読申込先
NOSAI宮城
仙台市青葉区上杉
1丁目8番10号
〒980－0011
電話022(225)6701
http://www.nosaimiyagi.or.jp

備えの種をまこう。

マイペースが信条

良品、安定出荷を継続

東松島市　遠藤　利啓さん　68歳
利文さん　41歳

ナスのハウスで利啓さん（右）と利文さん

【東松島市】水田6㌶（大豆5・3㌶、水稲70㌃）と、野菜（レタス、トウモロコシなど）1・2㌶を手掛ける東松島市の利啓さんと利文さん親子。モットーは「百聞は一見にしかず」という利啓さんは「幼いころから農業をさせて、体で覚えさせた」と話す。

利文さんも「父の姿を見よう見まねで作業に取り組んできた。自分でやるようになっても、大きく難しいことはなかったと思う」と振り返る。

利啓さんは就農50年、利文さんは県農業実践大学校（現農業大学校）卒業後、卸売市場に10年間勤務。その後、家業を継いで9年目を迎える。

「ただ仕事をこなすのではなく、経営や作業に責任を持って家族を引っ張ってほしい」と利啓さんは利文さんを頼りにする。

「父には、健康に注意してもらいながら今までどおり、一緒に営農を続けていければ」と利文さん。「規模拡大といった目標でなく、自分たちのペースで現状を維持し、良品質なものを安定出荷していきたい」とこれからを見据える。

「孫たちのために、専用の畑を用意している。今年も一緒にトウモロコシの収穫をするのが楽しみだ」と利啓さんは笑顔で話す。（畠山陽）

part2

親子で農業

追いたい背中・支えたい背中

親と同じ道を志す農業後継者たちが着実に育っている。親はその成長を支えながら、いずれ経営を託していく――。7月2週号に続き、親子で農業に取り組むみなさんに互いの想いや今後の目標を聞いた。

繁殖経営をスタート

肥育と併せて100頭へ

登米市米山町
鹿野　耕史さん　58歳
昭子さん　57歳
仙石　聖美さん　30歳
和久さん　31歳

大豆製品は「まえむき耕房かの屋」で直売も行う

【登米市】登米市米山町の株式会社かのファーム（2014年設立）は、耕史さんと昭子さん夫妻、聖美さんと和久さん夫妻の4人で肥育牛80頭を飼養。その他に大豆7㌶と水稲2㌶を栽培する。

大豆は委託して納豆、豆腐、油揚げなどに加工し、県内スーパーや道の駅米山などで販売する。

聖美さん夫妻は繁殖牛30頭を飼養し、秋には初めての出産を予定。今月、畜舎が完成し新たなスタートを切ったばかりだ。

大学進学時に牛飼いを目指すことを決意した聖美さん。卒業後は仙台中央食肉卸売市場に就職し、5年間勤務した。「取引後の枝肉がどう流通するか知りたかったので、良い経験になった。市場でできた人脈を生かして、立派な牛飼いになりたい」と聖美さんは話す。

「仲間づくりに取り組んでほしい。関わる全ての人に感謝しながらつながりを大切にしてもらえれば」と昭子さん。耕史さんは「自分たちが知る限りの知識・技術を最大限に教え、サポートしていきたい」と話す。

「就農から3年がたったところ。まだまだ半人前で、これから両親と一緒に仕事をしながら、経験を積んでいきたい」と聖美さん。また、和久さんは「農業は初めての経験。新鮮で毎日充実した生活を送れて楽しい」と機械作業など、積極的に聖美さんを支える。

聖美さんは繁殖牛を20頭まで増頭し、肥育牛と併せて100頭の飼養を目指し、奮闘していく。（浅野ゆ）

知識・技術を受け継ぐ

加工品の販売にも意欲

白石市
木須　君男さん　73歳
敏文さん　47歳
悠友さん　25歳

「家族だから自分の考えを言えないときもある」と笑い合う3人

【白石市】「息子や孫に『家業を継げ』『農家になれ』と言ったことは一度もないが、就農してくれた。自分の農業に取り組む姿が次の世代にも伝わっていることがうれしかった」と君男さん。親子3代で、白石市の園地にリンゴと洋ナシ2・3㌶、水稲2㌶を栽培する。

幼い頃から家業として君男さんの手伝いをしてきた敏文さんは、「父の背中を自然と追ってきて、たどり着いたのが就農の道だった。仕事に熱心な姿を手本にしている」と話す。また息子の悠友さんについては「就農から5年がたち、作業のコツを覚えたようで、助言しなくても自分で行動できるようになった」と成長を感じている。

悠友さんは「祖父と父が長年管理してきた園地を、自分の代で終わらせられない。二人の豊富な知識・技術を吸収し、想いを継いでいきたい」と抱負を話す。

君男さんは、「固定概念にとらわれず、息子や孫の新鮮な経営感覚を生かして、新しいことに取り組んでいきたい」と2人の活躍を応援する。（吉田）

敏文さんと悠友さんは君男さんの摘果や剪定作業について「長年の経験を通して得られる技術なので、見習っている」と声をそろえ、技術を受け継ぐよう努めている。

いずれは、リンゴ・洋ナシを使ったジャムやシードルなどの加工品の販売に取り組んでみたいと考える敏文さんと悠友さん。「販売の9割が贈答用のため、商品の幅を広げて、付加価値を生み出していけたら」と話す。

TMR方式で効率化

増頭と乳量増を目指す

大崎市田尻
関場　宏行さん　57歳
渉太さん　25歳

「家族の存在と、頼りになる祖父や父に支えられている」と渉太さん（右が宏行さん）

【大崎市田尻】「家族や　していければ」と話す大崎市田尻の渉太さん。家族で乳用牛45頭を飼養し、牧草20㌶、WCS（発酵粗飼料）用稲13㌶の他、水稲4・5㌶を栽培する。

渉太さんは、加美農業高校、県農業大学校へと進学し、2014（平成26）年に、卒業と同時に就農。家業を継ぐために酪農の道を極めてきた。渉太さんの就農に合わせ、宏行さんは経営を譲った。

「学生時代からの仲間たち　ち酪農に精通する人たちは、効率の良い自分なりの経営を見出したい。恩返し　研修先で教わったことから、乳量一日3㌧を目指す。経営を安定させ法人化していきたい」と目標に向かう渉太さんだ。（佐々木）

「学生時代からの仲間たちも酪農に精通する人たちは、効率の良い自分なりの経営を見出したい。恩返し研修先で教わったことから、乳量一日3㌧を目指す。経営を安定させ法人化していきたい」と目標に向かう渉太さんだ。（佐々木）

高く持っている。情報収集は怠らない」と渉太さんの仕事に向き合う姿勢を話す。

経営移譲を機に、餌やりを分離給餌からTMR方式に切り替え、効率化を図った渉太さん。宏行さんは「渉太の就農後3年間は、餌やりや飼養管理に大切なことを教えてきた。本人もいろいろな人から話を聞いて、新システム導入のため勉強したようだった」と振り返る。

渉太さんは「忙しいときは一日14時間近く働くことがあるが、家族が率先して手伝ってくれる。祖父母も乾草を運んでくれて、まだまだ現役だ」と笑顔を見せる。

「今後は牛舎を新築し、乳用牛を120頭まで　増頭、乳量一日3㌧を目指す。経営を安定させ法人化していきたい」と目標に向かう渉太さんだ。（佐々木）